◆財政研究会リポート◆　第64回学習会

小平市の新年度予算について

発表：堀内 通成
報告：伊藤 栄一

小平市をずっと見続けて来た「小平まちづくり互助会」の堀内さんからお話しを伺いました。堀内さんは建築関係の仕事をしてきて、その視点から「小平市の予算」と共に小平市の再開発等のまちづくりについても話され、参加者にとって貴重な体験になりました。

財政研としては、結果としての決算だけではなく「コロナ禍の予算」に着目して、多摩市や日野市等を見てきましたが、小平市もこれまでに七回補正予算を組み、三月中にもあと二回ほど補正予算案が提出される予定とのことです。

小平市はＪＲ中央線の北側、武蔵野台地上にある面積二〇・五一㎢、人口一九万四八六九人の（令和二年一月一日現在）のまちです。市内には西武鉄道の多摩湖線、新宿線、拝島・国分寺線の三線？が往来し、鉄道駅が五駅もあります。交通の便が良いことから人口は現在微増を続けていますが、自治体戦略二〇四〇構想では、二〇年後には〇～一〇％の人口減に陥ると位置づけられています。

二〇二〇年度の当初予算は六九〇・八億円でしたが、コロナ禍での七回の補正により約九四三・六億円に増額、当初予算比約二五二・八億円の増、一・三六倍に膨らみました。

増額の最大の要因は、他の自治体と同様一人一〇万円の特別定額給付金、約一九八・二億円の計上の他、子育て世帯、ひとり親世帯等への給付金や中小企業等への支援金、ギガスクール構想に基づく小中学校生への一人一台のタブレット端末の購入など、前回、前々回の研究会で見た多摩市や日野市の内容と大きな差異はありませんでした。

補正の財源も国・都支出金で九二・七％（多摩市は八八・五％、日野市九四・七％）賄われており、コロナ禍で大きく膨れ上がった小平市の予算も、多くが国や都の事業を受けたものであったことが分かります。

次に、小平市の二〇二一（令和三年）年度当初予算は、補正で積み上がったものの平時に編成された二〇二〇年度の当初予算約六九〇・八億円を下回る約六八六・七億円ということでした。

地方自治体の予算編成は均衡予算（歳入と歳出の各合計がイコール）が義務付けられていますので、いくらコロナ編であっても財源の裏付けがない歳出予算を組むことができません。

コロナ編で課題・問題山積みの中、平時に策定した二〇二〇年度の当初予算より、予算規模が縮小しているのは心配です。

前年度比減になるということは、歳入の根幹である市税△四・四％など歳入状況が厳しくなっていることの表れだと思いますが、歳出の主な事業に見る「新型コロナウイルス感染症への対応」では、「ＧＩＧＡスクール構想の実現に向けた環境整備」「ＰＣＲ検査センター運営費の補助」、「市役所のＩＣＴ化」

などで、合計約一・三億円が組まれています。
　この額が少なすぎるのか、これで充分なのか、国や都の具体的な予算の全体像が見えない中、当初予算としては仕方がないのか分かりませんが、小平市はコロナ禍でも平時に近い当初予算編成をしたかの印象を持ちました。
　堀内さんは次に、小平市の「公共施設マネジメント推進計画」と、その関連で問題が指摘されている「小平第一一小学校建替え・複合化」問題と「小川駅西口再開発事業」についても報告されました。
　小平市公共施設マネジメント推進計画の大本となる同「基本方針」は、二〇一五(平成二七)年に策定され、人口減少・少子高齢化・財政バランスの悪化・公共施設の老朽化等に対応する基本方針だそうで、最終年度の二〇六二年度に向けて、立て替えや更新時期が集中する公共施設を拠点化し、市内で一九校ある小学校を中心とした複合化を進めていく、というものだそうです。
　二〇六二年度に向けた計画の今は第一期(二〇一七～二〇二六。現在見直し中)だそうで、小学校を地域の核とした地域コミュニティの醸成を図り、その際、「国の公共施設二割削減方針」に従い、小平市では延べ床面積を二〇%以上縮減するために、延べ床面積の六割を占める小中学校の統合も考えてゆく、としています。(小学校一九→一四校程度、中学校八→七校程度。同推進方針二〇一七～二〇二一)小平第一一小学校へ複合化する施設は(令和二年一二月現在)、一一小学童クラブ、花小金井北公民館、花小金井北地域センターで、これをモデルに今後、他の小学校を更新していく際に、公民館機能及び地域センター機能等を小学校に複合化していく考えだそうです。
　なお、同小学校の近隣にある花小金井保育園は民間移行(複合化の検討対象から除外)、中央図書館花小金井北分室は廃止の方向だそうです。
　堀内さんは次に、小平市が最も力を入れている「小川駅西口再開発事業」に触れました。
　同再開発事業(組合施行、面積一・二ヘクタール)は、西武線小川駅西口に隣接するこの地区を再開発し、現状は商店も少なく、小さなスーパーもない駅前のこのエリアに、地上二七階建ての「再開発ビル」を建てる計画、とのことです。
　「再開発ビル」の地上五階までに商業店舗や公益施設を集約し「地域生活を支える複合市街地」を形成し、六～二七階はファミリー世帯(約二一四戸)中心の「住みよい集合住宅」を整備する、といいます。
　小平市が取得予定の四・五階に集約される公益施設は、公民館、図書館、市民センターなど、これまで独立していた四つの施設とされ、四階に設置される事務室に一緒に入るのか、総合受付案内は五階にも必要でないのか、吹き抜け、らせん階段は必要か…等々、様々な議論が起きているようです。
　堀内さんの話を聞いて、今まで地域の住民の生活文化を支えてきた多くの公共施設が耐用年数を迎え、長寿命化などの延命策をとったにしても、又とらなくても、そこにあって当たり前から、残すか残さないかシビアーな選択を迫られる時代が来つつあるのかなー、とある意味ショックでした。
　この再開発ビルは、予定では令和四年度着工、令和六年度以降に竣工のスケジュールですが、現状では一年以上後にずれ込むようです。
　堀内さんは、駅前に高層ビルを建てても、東村山や国分寺、武蔵小金井の駅前ビルとほとんど同じだ。少子高齢化、人口減少社会が到来する中、コンクリートの大規模化を図るより、木材を使って小規模化も考えてみるべきだと言います。木造であれば、壊さなくても柔軟に広げたり、剥ぎ取ったりすることも可能です。
　東京日本橋で「木造オフィスビル一七階建て」高さ七〇メートル(三井不動産と竹中工務店の共同設計、二〇二三年竣工予定)なんて話も聞きます。
　未来はコンクリートづくめだと思っていましたが、また日本は古来からの木の文化に戻ることもあり、と聞いて妙に目が開かれる思いがしました。

ディストピア小説が描く米保守政治の末路

マーガレット・アトウッド『侍女の物語』『誓願』、オマル・エル＝アッカド『アメリカン・ウォー』

（獨協大学教授）本田　浩邦

過去の単純な延長でない事物の変化を「非線形的」と呼んだりする。グラフの線が折れ曲がった状態だ。米大統領選直後、選挙結果に不満をもったトランプ支持者による議会議事堂襲撃は、民主主義国である米国の政体がクーデターによって危殆に瀕し、非線形的に展開する可能性があることを示した。そしてその可能性は、議事堂乱入を煽ったトランプ前大統領に対する弾劾決議が否決されたことによってこれからも残る。

もともとトランプという政治経験のない公然たる女性蔑視の候補者が、かつてない移民バッシングを売り物にしてできたことからすれば、この政権自体が従来の米国の二大政党政治の流れとは断絶したものだったともいえる。

非線形的な変化は、線形的な場合よりもより複雑な説明が必要であり、そうした分野は政治学や経済学の専門家よりも、小説家が得意とする領域である。非現実的なはずのディストピア小説が奇妙な現実味を帯びて注目されているのはそのためだ。

「トランプ的なもの」を支える原理主義陰謀論や環境破壊をめぐるイデオロギーとその帰結を作家たちはうまくとらえている。

キリスト教原理主義が支配する米国――マーガレット・アトウッド『侍女の物語』

その一つが、カナダの作家、マーガレット・アトウッドの小説『侍女の物語』で、議会議事堂が襲撃されるというクーデターによって、米国の一部がキリスト教原理主義の軍事的神権国家〈ギレアデ共和国〉になるという物語である。

一九八五年に世界的なベストセラーとなり、アーサー・C・クラーク賞などを受賞した。映画やドラマにもなり、トランプ政権の誕生にともなって再び注目されてきた。Qアノンなどが話題になるたびに、新聞記事などでも盛んに取り上げられている。

ネタバレでない程度に内容を紹介するとこうである。キリスト教原理主義者らがクーデターによって実権をえたギレアデ共和国は周囲と戦争し、国内では厳格な宗教戒律に基づく位階制度を敷いた。

白人の出生率の増加に取り組み、女性は男性との関係で〈妻〉〈便利妻〉〈侍女〉〈保護者〉〈小母〉〈女中〉といった従属的な役割を与えられる。これまでの世俗的な享楽はいっさい排除される。女性は、「禁欲と精液と赤子を入れる卑しい器」にすぎないと教育され、文字を読むことも許されない。市街地では、〈目〉と呼ばれるスパイ組織が市民を監視し、かつて中絶の手術

を行った経験のある医師たち、姦通した女性、反逆者らが公開処刑され、それをまぬかれたものも放射能や化学物質の汚染にまみれた廃棄物処理の作業現場〈コロニー〉に送られる。

主人公は、〈司令官〉の子どもを生むことだけを役割とする〈侍女〉、いわば側室である。かつて大学寮であった宿舎で厳しい戒律と監視のもとで暮らす彼女は、クーデター以前の家族と生活を取り戻そうとレジスタンス運動に関わる――

アトウッドがこれを書いた一九八〇年代半ばはレーガン政権の最盛期だった。ニクソン政権以来、共和党が追求した「南部戦略」(The Southern Strategy)、つまり南部バプティスト連盟など宗教右派を味方につけ、人種問題で南部白人中間層を煽り、彼らを民主党支持から共和党支持に変えるための組織的かつ地道な運動が、レーガン政権の成立というかたちで結実した時代だ。このころから北部と西海岸は民主党、南部は共和党という現在の支持基盤の棲み分けができた。現在の米国民の中にある人種差別と非合理主義はこうした長い政治的教育が積み重なった結果できた産物である。

この変化を支えたイデオロギーは、レーガン大統領の新自由主義、つまり民主党の所得再分配政策に対して反福祉を掲げた政策だけではない。宗教右派は人工中絶反対、家族の価値の重視、銃規制反対、移民規制強化など文化的な争点を前面に打ち出した。これらはいずれも一見、非政治的な争点だが、真綿で針を包むように人種差別的意味合いが込められていた。小説に黒人やヒスパニック、アジア系は直接にはでてこない。むしろ隠されている。にもかかわらず、この小説にはキリスト教保守派が権力を掌握し、政治体制となった結果、神への絶対的な服従を強要する、白人にとってもおぞましい家父長制的な政治体制ができあがるという皮肉が込められている。

原理主義国家のその後――マーガレット・アトウッド『誓願』

『侍女の物語』から三五年を経て二〇一九年に書かれた続編が『誓願』で、ブッカー賞を受賞している。前作が一人の侍女の語りで構成されたのに対し『誓願』は三人の視点から物語が描かれる。

一人は、支配中枢にまで登り詰めたリディア小母。彼女は裁判官だったが、クーデター後に転向を迫られ、その後、手荒な弾圧に手を染めながら権力の階段を上りながら、密かに手記を綴る。二人目は、〈司令官〉の娘アグネス。女たちの生活に違和感をもつ彼女は、友人ベッカとともに〈妻〉となることを拒否し〈小母〉として生きていく決意をし、リディアのもとで教育を受ける。

三人目はカナダで暮らすデイジーで、彼女はレジスタンス運動家の両親に育てられるが、両親が殺害されたのち特別の任務を帯びてギレアデに潜入する――

ギレアデ共和国ができた直接の背景は、それまでの米国の自然災害の多発や原発問題、失業問題、出生率の低下などであり、原理主義者はその責任を既存の政治勢力に押し付けてクーデターを成功させた。

クーデター時に抗議した人々がスタジアムに集められる模様などは、一九七三年のCIAによるチリ・クーデターを彷彿とさせるものであり処刑のシーンなどは迫真に満ちている。リディアはそこで支配層への忠誠を誓った。

できあがったギレアデの政治は息も詰まるような窮屈な神権政治であり、女性たちは、結婚と出産をなによりも優先する戒律

に縛られ、嫉妬、いがみ合い、密告のなかで暮らしている。支配層は性的にも腐敗堕落し国内の監視と弾圧は強まる。三人の物語が結びついて展開されるクライマックスはスリリングで、エンターテインメントとしては前作を上回る。

ここで描かれるキリスト教原理主義勢力の支配体制はいわばイスラム原理主義の政治体制とほぼ同じものである。つまり米国の戦後の対外介入政策が直接的もしくは間接的にその成立に関わった歪んだ政治体制が米国自体において築き上げられるという物語だ。しかもその素材となるものはどれもこれもアメリカ自身のものである。

環境問題が生む「第二次南北戦争」――オマル・エル＝アッカド『アメリカン・ウォー』

トランプ政権時代に書かれたオマル・エル＝アッカド『アメリカン・ウォー』も世界的に話題となった一冊である。それは、一言でいえば、環境問題を争点に再び「南北戦争」が起こるというフューチャー・ヒストリーだ。

主人公の少女サラ・チェスナットは、温暖化のために水面の上昇した米国南部、ミシシッピ川のほとりで家族とともに暮らしている。「自由南部諸州」（ルイジアナ、アーカンソー、ノースカロライナ、テネシー）は、化石燃料の使用を禁止する東部諸州の「持続可能な未来法」に反対して独立を求め、二〇七四年から温暖化対策を進める政府と交戦状態に入った（「第二次アメリカ南北戦争」）。米国は中国とアフリカから持ち込まれる物資に頼っている。戦争は長期化し南部の戦闘はゲリラ化する。サラも武装組織に加わる――

エジプト生まれの作者がこの小説で描くのは今日のイラクやアフガニスタン、シリアと見紛うばかりの紛争地帯と化した南部アメリカだ。米国と紛争途上国の立場が入れ替わった転倒した世界を提示することによって、現在の中東での紛争がいかに耐え難いものであるかを告発しているとも読める。

きっかけが何であれ、ある国の存立する内部的な均衡が乱されたときに、その国の歴史がまったく非線形な経路をたどり崩壊に至るというストーリーはアトウッドの作品と同様であり、これが環境問題を軸に米国で起こったという想定である。

トランプ氏が大統領就任直後に行ったことは、エネルギー長官や環境規制長官に温暖化否定論者を起用し、地球温暖化対策の枠組みである「パリ協定」からの離脱、国内を縦断する巨大パイプラインの建設にゴーサインをだしたことだった。この作品はトランプ政権誕生がもたらした政治状況の変化を反映している。

マーガレット・アトウッド『侍女の物語』『誓願』

「前近代」へと退化する米国

キリスト教原理主義の教義と温暖化否定という共和党と宗教右派が持ち込んだ政策の争点は米国社会に大きな亀裂を生んでいる。宗教保守派の中絶反対は家族の価値を強調する流れからでてきたものだが、それは裏を返せば、婚外出産や離婚の割合が高い黒人などマイノリティに対する批判が込められ、人種問題として政治的色合いを帯びる。

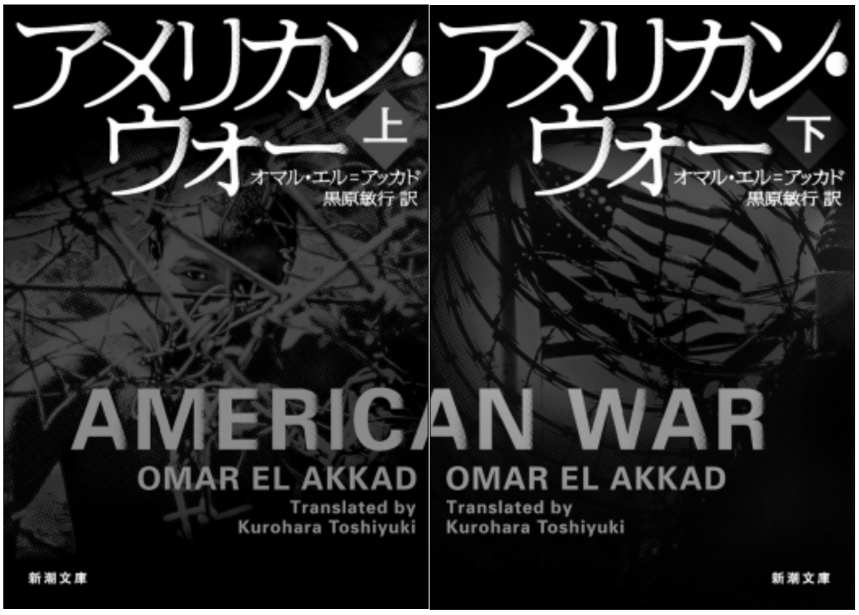
トランプ支持者の一部が信奉するQアノンの陰謀理論では、社会現象だけでなく、自然現象までもが敵対的な少数集団の利益や思惑で動いているとされる。この世界には秘密の支配勢力があり、それは悪魔崇拝の小児性愛者の陰謀団体である。それが戦争や不況、自然災害、選挙結果の捜査を意図的に生み出しているというのが彼らの主張だ。際立った善悪二元論で、彼らは敵対するものを排除するためには暴力をも辞さない。議事堂襲撃の参加者の醸し出す雰囲気は、中東のジハーディスト（聖戦主義者）のそれと似ている。

こうしたイデオロギーは、白人至上主義者、ネオナチ、隠れファシストの隠れ蓑であるだけでなく企業にとっても好都合だ。

格差拡大や貧困など、社会に渦巻く不満を解決するために、バーニー・サンダース上院議員ら民主党左派が、大幅な賃金の引き上げや包括的医療保障、教育ローン債務の免除などといった政策を主張するのに対して、彼らを陰謀団体であるかのごとく攻撃することで、そうした企業や富裕層の負担増となる政策を回避できるからだ。

さきの大統領選でバイデン氏の八一〇〇万票に対して、トランプ氏が敗れたとはいえ七四〇〇万票をとったという事実は、こうしたディストピア小説に不気味なリアリティを与える。

本田 浩邦（ほんだ ひろくに）
獨協大学経済学部教授。1961年生まれ。アメリカ経済論専攻。著書に『アメリカの資本蓄積と社会保障』（日本評論社、2016年）、『長期停滞の資本主義』（大月書店、2019年）ほか。



オマル・エル＝アッカド『アメリカン・ウォー』

（文献）

マーガレット・アトウッド『侍女の物語』斎藤英治訳、ハヤカワ文庫、二〇〇一年
マーガレット・アトウッド『誓願』早川書店、二〇二〇年
オマル・エル＝アッカド『アメリカン・ウォー』上・下、黒原敏行訳、新潮文庫、二〇一七年

タマの風 vol.94

3・11から十年 ④
死者との対話をどう描くか？

神子島 健
（かごしま・たけし）

竹造　そいじゃけえ、おまいはわしによって生かされとる。

美津江　生かされとる？

竹造　ほいじゃが。あよなむごい別れがまこと何万もあったちゅうことを覚えてもろうために生かされとるんじゃ。（井上ひさし『父と暮らせば』より）

さて、三月中旬の夕方、多摩研事務所で会議があるので数名が早めにやって来て、東日本大震災から十年の報道について話している。吾輩は午睡から目覚めたばかりでまだ床にごろにゃんとしている。

「十年というのは、当事者にとっては必ずしも大きな意味を持つとは限りませんよね」と編集長。「原発事故とそれ以外の被害では全く違いますしね」「ただ、十年という時間で何がどう変わって、何が変わらなかったのか、検証するひとつの機会にはなると思います」

「どうしても、三月一一日に報道が集中してしまうのが気になります。少なからず津波の映像なんかも出るので、精神的にきついものがあります」「十年だから形式的に、というのもなくはないでしょうが、きちんと何年も関係を作ってきた当事者に丁寧に取材して作っている番組も多いので、集中してしまうのはもったいないですよ」

「いやあ、遅くなりました」と、事務所に坊主頭が入ってきた。「おお、Kさん（坊主頭のこと）、元気でしたか」

坊主頭は入ってくるなり、珍しく一目散に寝そべっている吾輩を抱き抱えて頭を撫でてくる。「タマがKさんに素直に抱かれるのは珍しいですね」とノゾミさんがいうと「まあ、本当は私のことが大好きなんですよ」という。寝ぼけていて油断していたにゃ、吾輩はキーっと牙をむいて威嚇するが、こやつは気にせず吾輩を抱き抱えてイスに座る。

「震災から十年の報道について話していたんですが、Kさんはどう見ましたか？」と研究室長が話を向ける。「そうですね…。毎年こいつ〔吾輩のことである〕と東北に行ってたんですが、コロナがあって、去年は行けなかったわけです。最近は震災の記憶をどう伝えるのか、「伝承館」などが各地でできていますよね、それがひとつは気になりますね」「気仙沼の伝承館はみんなで行きましたね」

「報道とちょっとちがいますが、震災に関連するドラマを四本見たんですよ」「ドラマですか」「四本中三本に、幽霊というか、要するに震災で亡くなった人物、いずれも主人公にとっ

気仙沼向陽高校の震災遺構、2017年11月。
現在は気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館となっており、今号の表紙写真は、この遺構を内側から撮影したものだにゃ。

じように暮らしている、という世界観が感じられます」「ふーむ」

『ペペロンチーノ』（作・脚本：一色伸幸、NHK-BSプレミアム、二〇二一年三月六日）というドラマは、主人公の潔（きよし）の傍らで、死んだ連れ合いの灯里（あかり）が、見守っているんですが、一緒に食事したり、会話したりしているんです。灯里の存在は「何か変だ」と視聴者は思うのですが、彼女が死者であることが視聴者に明かされるのは作品の最後の部分です。ちなみにイタリアンレストランの話なので、ペペロンチーノという題になっています。

潔は悲しみに打ちひしがれてアルコール依存症となり、依存症と向き合いながら料理人として立ち直っていく、それを灯里が見守っているという形です。灯里は、潔が絶望的な状況にいた時は遠くから見守っています。アルコールを断つ決意をした後から、近くで寄り添うようになっています」「ということは？」「灯里がそばで見守っていてくれると思うこと、言い換えると灯里との自己内対話を通して、潔が立ち直っていくわけです」

「なるほど。これが文学であれば、亡くなった人との心の中での対話を文字として表現する、という形になるでしょうが、映像の中で自己内対話をそのままやるのはわかりにくさがあるわけですね。ですが、死者がそこにいて動いている形にすれば、視聴者には文字通りの「死者との対話」が伝わるわけですね」と編集長が解説する。

白ヒゲの研究室長がさらに解説する。「ある人物の心の中の葛藤を形象化するために、別の人物を設定して当人と対話させるというのは、演劇などでよく用いられる手法です。例えば、広島で被爆した若い娘、美津江と、彼女の目の前で亡くなった父の竹造の対話劇である、井上ひさし『父と暮らせば』がそうですね」「映画にもなりましたね」

「死ぬのが当たり前だったという原爆投下時の広島で生き残ってしまったことに美津江は罪悪感を抱くわけです。しかしその中でも恋をして、生きる喜びを感じる自分を戒めようとする。その恋を応援するために、父が出てくるわけです」

坊主頭が言う。「例えば、『父と暮らせば』と『ペペロンチーノ』で大切だった人たちが出てくるんですよ」「つまり、生きていた時の回想ではなく、死んだ後に出てくるということですか？」「そうです。作品ごとに多少位置づけは違いますが、「幽霊の話」みたいに奇異な存在として描かれるのでなく、死者が現世と同

前回に引き続き、香川のウッチーであるにゃ。

ノ』を比べると、『父と暮らせば』の父娘の対話は、家という閉じた空間の中、第三者のいないところで行われるわけです。『ペペロンチーノ』では、主人公がほかの人とやり取りしている場にも灯里は一緒にいる。あくまでほかの人には見えないのですが（ただし作品の途中まで見えないことは視聴者にはっきりとわからないように作ってある）、主人公がやっているレストランでも、まるで一緒に手伝っているようだし、パーティーで一緒に乾杯したりするわけです」

「ふーん、それは何の違いなんでしょうね」「死者との対話よりも、「見守っている」とか「そばにいる」という感じが強いですね」「なるほど」と、話に熱中して、坊主頭の腕がゆるんだすきに吾輩はきゃつめから脱出して、机の下に潜り込むのである。

「その違いと関わるのですが、『父と暮らせば』の中では、美津江と竹造が、竹造が亡くなった時のことを語り合うんです。焼ける家の下敷きになった父を助けられず、父を見捨てたと思う美津江に、その時のことを話しながら「わしの分まで生きてちょんだいよォー」と竹造の最期の言葉を思い出させるわけです。父の幽霊との対話を通して父の死の悲しみと向き合い、それを乗り越えていくという形になっています」。ちなみに、今回の冒頭に抜き出した部分はその一部であるにゃ～。

「『ペペロンチーノ』の場合、灯里が亡くなった時の状況を二人が語り合うようなことはありません。ただし、震災から十年を迎えた日、レストランに呼んだ知人達に、「わかってるんだ。ここに灯里はいない。でもいるんだ」と、心の中の灯里の存在が自分にとっての支えであることを伝えます。

そう考えると、『父と暮らせば』では自己内の葛藤を形象化したのが竹造だったのと異なり、『ペペロンチーノ』の灯里は、失った大切な人が心の中で生き続けていることに意味づけがあるので、死者の位置づけが異なるということですね」

とりあえずどちらがいい悪いではニャく、作品の構造の違いから、特徴が見えてくるということだにゃ。

最後にもう一つ重要なシーンの説明を付け加えておくにゃ。津波で流されたレストランを再建して評判となり、メディアが取材に来る。そこでは潔の存在が、被災者の再生の物語として切り取られて伝えられる。しかしある時、店の料理を純粋に評価してくれた記事が出てくる。その記事を書いたライターに、感謝とともに「オレは被災者じゃない。オレは料理人だ」と、心の中のわだかまりを伝えるのだにゃ。

「震災十年」でくくってしまうことじたい、吾々は気をつけなければいけないのかもしれニャい。

多摩研事務局活動報告

事務局よりご報告

多摩研の事務所がある日野周辺では、いま桜が満開です。緊急事態宣言が出されてから、あっという間の1年でした。多摩研事務局長1年目の私にとって、何から何まで初めて向き合うことばかりで、悩みが多い1年でした。（池上さんからは「悩むばかりで考えようとしない」と指摘され、その通りだと思いました…）

しかし、理事や会員の方々に相談したり、意見を伺ったり、ご支援をいただいたりしながら、何とかここまでは、やってこられました。

この1年を通して、多摩研事務局で学んだことは、基本に忠実であることが重要だということでした。コロナ感染で先が読めず、例年通りやっていけばいいということが通用しない状況で、多摩研自体の活動をどう考え、どう組み立て、決定、実行していくのか。この軸とすべき基本は、多摩研の定款と『緑の風』、そして理事の森松さんが現在作成してくださっている多摩研50年の年表でした。多摩研が何のために存在していて、この50年間、どんな形で、どんな活動をしてきたのか。今はＮＰＯ法人という形をとり、何を目指しているのか。

中でも定款は、形式的なことと思いきや、その形式や手順等の意味することが、とても重要だということを、実践として学ぶことができたのは、大きなことでした。「自治」を行うためには、何が必要で、今までの経験から、何が積み上げられてきたのか。形式や手順に忠実に取り組もうとすればするほど、会員の一人ひとりが何を望んでいるのか等、声を聞かなくては「自治」が実践できないことがわかってきました。

多摩研の会員のみなさんは、「そんなこと当然じゃないか」と思われるかもしれません。しかし、組織として市民の自主的な活動など、今までしたことのなかった私にとっては、大変貴重な経験でした。（こんな事務局長で大丈夫か？と思われる会員の方は、遠慮なく、理事長等にご意見を！）

雑誌『世界』2021年4月号の片山善博さんのシリーズ「日本を診る」では、「オリパラ組織委員会新会長選出の正当性を問う」という文章が載っていました。日本は法治国家として機能不全に陥ろうとしているように思えてなりません。まずは、自分の足元からですね。（とは言いつつ、暗中模索の日々ですが…）

さて、話は変わりますが、多摩研50周年の2021年からは、「ジェンダー」をはじめ、意識して「差別」について学び合っていきたいと思っています。『緑の風』でも、現在、企画を仕込み中です。

私は、一昨年から狛江のM.A.P.に通うことが増えました。以前『緑の風』（2019年11月号）でもご紹介した「喜多見と狛江の小さな映画祭＋α」の拠点です。そこには、日常的に様々な方々が出入りし、電話がかかってきたりしています。素敵だなと思うのは、それぞれの具体的な生活が見える距離感だというところ。例えば、視覚に障害を持つ方とも、そこでは気軽に会話ができたり、隣に座っている人が自然に手を取って、視覚障害者の方をトイレまでつきそう姿を見たり。その陰には、どんな人たちの心遣いがあるのか。そんな場所があちこちにできるといいなと思っています。（多摩研事務所も！）

事務局長　鈴木 望

2021年2月の活動報告

- 1日(月)・2日(火)
  第41回 議員の学校
- 4日(木)　小金井市民より相談(池上さん)
- 8日(月)・9日(火)
  市町村財政分析基礎講座②
- 10日(水)　多摩地域独立構想研究会
- 11日(木)「緑の風」編集会議
  緑の風と今を読み、語る会(1)
- 19日(火)　議員の学校企画運営委員会
  多摩研50周年映画祭プレ・トークイベント①
- 22日(水)　多摩研創立50周年事業事務局会議
- 23日(火)　多摩研50周年映画祭プレ・トークイベント②
- 27日(土)　財政研究会
- 28日(日)　多摩研50周年映画祭プレ・トークイベント③

多摩研会員のみなさま、e-mailアドレスをお教えください！

多摩研では50周年に向けて、『緑の風』以外にも様々な情報をe-mailにて発信したいと考えております。つきましては、会員のみなさまのe-mailアドレスをお教えください。ご自分のe-mailから下記のアドレスに以下の内容を入力の上、ご送信お願いいたします。

※添付でPDFファイルやWord・Excelファイル等も送信する可能性が高いため、PCのe-mailアドレス（携帯のe-mailアドレスは不可）をお送りください。既にe-mailで多摩研からのお知らせ等が届いている方は、お送りいただかなくて結構です。

◆宛先：tamajitiken1972@space.ocn.ne.jp

◆件名：多摩研メールアドレス登録

◆内容：ご自分のお名前（フルネーム）

こちらのQRコードから「多摩研お問合せフォーム」にアクセスしていただき、ご自分のお名前とe-mailアドレスをお送りいただくこともできます。

編集□誌 ひとこと ふたこと

『緑の風』編集委員を中心に、有志の集まりでジェンダー平等についての座談会を実施しました。

第一のテーマは生活の中のジェンダー平等について日頃聞けないような生活の話からです。

奇しくもとあるテレビ番組が「ジェンダー平等をスローガンとして掲げるのは時代遅れ」といった内容のＣＭを作成し、批判を浴びましたが、座談会の中で生活を具体的に見ることで、時代遅れどころか現在の生活の中に、ジェンダーの不平等は表れる、そんな興味深い座談会ができました。

例えば、ご家庭のトイレットペーパーは誰が補充していますか。

補充する事が偉いとか、大事な仕事だという話ではなく、生活の基本を知らず知らずのうちに、家庭の誰かに任せていませんか。

その誰かが自己決定以外の社会的な役割の押し付けで決まった時に、不平等は始まるのではないかと思いました。

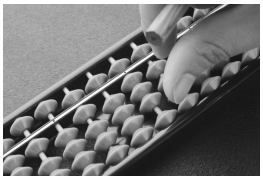
（事務局　松川遥）

財政研究会のお知らせ

第65回 学習会

図書館の評価について

報告者：松尾 昇治 氏（福生市）
日　時：2021年
　　4月3日(土)　14：00～
場　所：多摩住民自治研究所
参加費：300円



アマビエTシャツ
在庫は残り少数となっております。
詳しくは事務局までお問い合わせください。